

第61回

読売教育賞 受賞者論文集

実践活動の概要



2012年(平成24年)
読売新聞社

「海のくに・日本」のありがたさを、 こどもたちに伝えたい



ウーマンズフォーラム魚（略称：WFF）代表

しら いし
白石 ユリ子

1933年、北海道生まれ。大学卒業後、出版社で日本人の伝統文化、生活文化に関わる書籍を多数編集する。1992年、漁業を取材して「魚食は、日本の伝統的食文化でありながら、漁業に対する関心は農業に比べて極端に低い」ことに危機感を持ち、生産者の女性と消費者の女性がともに“漁業と魚食文化の未来”を考えるネットワークづくりを提唱。翌1993年、ウーマンズフォーラム魚(WFF)を発足させ、自ら代表を務める。以来、「WFF 全国シンポジウム」でさまざまな切り口から海と魚の問題を掘り下げ、「浜のかあさんと語ろう会」で全国の漁村と首都圏の消費者を結ぶ活動を推進している。こどもたちへの海と魚教育活動 = 「海彦クラブ」「東京湾まるごと探検隊」では、海の生命が私たちの暮らしにつながっていることを伝えている。2010年、ウーマンズフォーラム魚のこどもプロジェクトを深化・発展させ、海と魚をテーマにした図書資料の充実をめざす「NPO 海のくに・日本」を発足させ理事長を務める。連絡は、東京都中央区銀座3-12-15のウーマンズフォーラム魚事務局まで。

第61回 読売教育賞から 【地域社会教育活動】

読売
教育
賞
から
第61回

■ 地域社会教育活動 ウーマンズフォーラム魚 白石ユリ子さん

白石ユリ子さん(78)が日本魚食文化を伝える必要を痛感するようになつたのは、「出版社で伝統文化に関する本の編集に携わってきた経験から」だという。本魚食文化を伝える必要を痛感するようになつたのが、「浜のかあさんと語ろう会」。全国の漁師の妻たちに自慢の魚を持参してもらい、子どもたちにさざなぎ方や調理方法を手ほどく



子どもと一緒に北海道知内町から届いたホタテをむく白石さん(東京都中央区で)

海の恩恵 感じさせたい

白石さん(78)が日本魚食文化を伝える必要を痛感するようになつたのは、「出版社で伝統文化に関する本の編集に携わってきた経験から」だという。本魚食文化を伝える必要を痛感するようになつたのが、「浜のかあさんと語ろう会」。全国の漁師の妻たちに自慢の魚を持参してもらい、子どもたちにさざなぎ方や調理方法を手ほどく

きしてもう取り組みだ。最初は小学校を回って協力を求めて、「包丁で力でもしたら大変だ」と断られ、開催をきつけるまで2年かかった。趣旨に賛同した一人の教師が学校を説得してくれてスタートさせたのが1996年。以来実績は105回を数えた。

2000年から始めた「海彦クラブ」では、子どもたちを漁船に乗せて、体験を発表させる。「海のありがたさを実感した」と皆、日本海の水産国に比べて、本では漁業の役割を伝える取り組みが運れていることに、もづかしさを感じる。「日本ほほえ海の恩恵にあづかってきた国はない。少しでも多くの若者がそれに気がつくといふればいい」

佐藤一子・法政大学教授 「魚を水揚げする浜のかあさんたちと都会の小学生・保護者・教師が交流し、日本の魚食文化や漁業を考えるという、市民団体によるユニークな取り組みだ。地震で被災した浜にも心を寄せている。海の素晴らしさを体験した子どもたちの声が聞こえてくる報告である」

【最優秀賞選評】

佐藤 一子 法政大学教授

「魚を水揚げする浜のかあさんたちと都会の小学生・保護者・教師が交流し、日本の魚食文化や漁業を考えるという、市民団体によるユニークな取り組みだ。地震で被災した浜にも心を寄せている。海の素晴らしさを体験した子どもたちの声が聞こえてくる報告である」

◎海に生かされてきたことに 感謝

海—この存在なくして私たち人類の存在はありませんでした。はるかな昔、この地球の歴史とともに水が生まれました。水は、地球の循環のなかで蒸気や雨とその姿を変えながら、いつしか私たちが「海」と呼ぶ存在になりました。そしてこの海から、多くの生きものが生まれ、その最後の瞬間に生まれた奇跡のような生命体—それが私たち人類なのです。

私たちの体には、いまも海から生まれた記憶が残っています。私たちのからだの60%は水からつくられています。このバランスが崩れたところに病があり、それが死にもつながりますが、循環という視点に立てば、死もまた生の始まりです。死があるからこそ再生があり、いのちが循環するのです。

水を生んだ地球は、地表の4分の3を海によっておおわれていますが、このバランスも絶妙なものといえます。マグマを抱えた地球は本来、熱の星ですが、地球が熱を持ちすぎると海がやさしく冷やし、長い月と日の間、地球の爆発を防いでくれてきたのです。

この奇跡のような生命の誕生と死の繰り返しのなかに、私たち人類の生命があり、暮らしがあります。いま、このことを真摯にうけとめなければ、私たちの未来はありません。いま、私たち人類に何よりも必要なことは、海への感謝の思いにほかならない、と私は思っています。

ぜひ今宵、海に思いを馳せてみてください。そして波の音をきいてください。海から離れていても、波の音は十分に体感できます。あなたの心臓の鼓動は、あなたの体のなかにある海の波音なのですから。

大海原の寄せては返す波は、昔もいまも変わることはありません。小さな生命体から大きなクジラまでが棲み家としていることも、海が安定した存在でありつづけていることの賜物といえます。賜物とは、いったい何でしょうか。私は、「人智を超えた存在から、私たち人類にもたらさ

れた贈り物」だと思っています。

私たち人間は、あたかもこの地球の主であるかのような顔をして、68億人の仲間とともにこの星に暮らしていますが、私たち人間の生と暮らしを支えてくれている大地も、森も、川も、海も、一つとして人間がつくったものはありません。すべて、人間に貸し与えられているものであり、私たちは一時、住まわせもらっているにすぎません。その自覚こそ、「賜物」であると、私は考えています。

海は、あまりにも大きな懐で私たち人類に恩恵を授けつづけてきたため、人間は時として海の恵みが私たちに貸し与えられていることへの感謝と自覚を忘れてしまうのです。この100年はまさに、それが顕著となってしまった年月でした。

海は、深く広く、多くの生命を宿し育む存在です。あらゆるものをお飲み込み、浄化し、再生してくれる存在です。海は、めったなことでは主張せず、ただひたすらにこの地球と、地球に暮らす人類に恵みを与えつづけてきました。

海が主張するのは、人類による海への冒涜が限度を超えたときです。あらゆるものをお浄化してきた海も、化学によって生み出されたものは、浄化し尽くせません。多くの生命体を生みだしてきた海も、その自然増加量を超える生命が略奪されてしまっては、再生させることができなくなります。そうした問題が次々におこってきたのが、この100年間でした。

◎68億人の未来は、 海にかかっています

これから、私たちはどうすべきでしょうか。68億人が団結して、事にあたらなくてはなりません。団結して行うべきことは、海を疲弊させず、海の特性を最大限に生かし、その限度を超えない範囲で、海とともに生きていくことです。それが、今日を生きる私たちに課せられた課題であ

ると、私は考えています。そして、事態はかなり深刻であるとも受け止めています。

地球が68億人の重みに耐え、68億人分の食料をまかなうには、従来の方法だけではもはや不可能です。それをどうするのか、ということに、68億人分の智恵を結集しなければなりません。そうでなければ、地球も、海も、増え続ける人間によって崩れ去ってしまうことになるでしょう。

では、68億人が結集すること、それははたして可能でしょうか。多くの困難がありますが、私は可能であると信じています。

まず、私たちがすべきことは、

1. 世界の海の現状をつぶさに調べること

国を超えて利害を超えて人類の未来のために海の現状を調べるプロジェクトをまず、始めましょう。幸いなことに、この方面ではすでに世界中の科学者が動き出しています。2000年から海洋生物の国際調査が行われており、昨年にはその一部が発表されました。世界には100万種を超える海洋生物が確認され、なんとそのうちの3万3000種が日本の近海に生息していることがわかりました。世界25海域のなかで豪州と並んで一番多くの種が確認されたことになります。日本人が世界有数の魚食民族であることは、海洋資源が豊富であるという自然環境のおかげといえます。

次には、

2. 海へのアクセス方法を大きな視点と、小さな視点の双方でルール化すること

1994年に発効された国連海洋法条約には、50年かけて話し合われた「世界の海のルール」が刻まれていますが、私がここで申し上げたいのは、ルールを超えたルール、とでもいるべきものです。心根の持ち方、自然環境への畏れともいいかえられます。

「海を汚してはいけない」——は、その第一に

あげられるべきことです。今回の東日本大震災の影響により福島第一原子力発電所から放射能に汚染された水が海へ放出されました。これこそ、海に対する大罪です。

事故でひととき漏れ出てしまうことがあったとしても、その後ただちに対処すべきところを、重ねて放出する暴挙に、私は怒りと畏れを覚えます。1年以上過ぎたいまも流出が報道されるることは、一企業の問題ではなく、日本政府の問題です。けれども諸外国から見れば、政府も民間も関係なく、日本人全体が海に対して感謝も畏れも抱いていない、と映っているのです。日本人は地球に暮らす68億人に対し、大きな責務を負ったと自覚しなければならないと私は考えています。そして、いきますぐに動き出さねばなりません。

小さな視点とは何か、といえば、それは一人ひとりの暮らし方の問題です。台所で、風呂場で、海辺で、仕事場で、と私たちの暮らしはどこであっても海とつながっているのです。「台所の外は海!」というのは、私が主宰するウーマンズフォーラム魚の合言葉ですが、この言葉が意味することを広く、深く受け止め、ひとりひとりが実行していただきたいと願っています。

以上、考え方について記しましたが、現実の社会は国家間の調整によって成り立っています。海へのアクセス方法も、国連総会、国際機関、漁業委員会、資源それぞれの経済協定や条約、などにおける話し合いによってルールが決められています。

海は世界200カ国とつながっていて、それに領海や經濟水域、經濟活動において主張があり、ぶつかりあうことがあります。日本人にとってなじみの深いマグロ、クジラについては、資源として利用したい国家と、護りたい環境保護団体とのぶつかりあいもあります。しかしどのような問題も、「海」に元気がなければ人間の存在そのものが成り立たないことに思いをめぐらし、話し合いに意味ある決着をつけてゆかなければならぬと、私は考えています。「海」に元気がなくなるということは、私たち人類の滅亡につながることなのです。

◎環境保護運動の原点は、 未来の世代のためにいま、 行動すること

今から50年前の1962年、米国の海洋学者であるレイチェル・カーソンは「沈黙の春」という本を書きました。それは、当時あまり知られていなかったDDT等、殺虫剤の残留性や生態系への影響の深刻さを世に問うものでした。「自然是、沈黙した。鳥たちは、どこへ行ってしまったのか。春が来たが、沈黙の春だった。農家では鶏が卵を産んだが、雛はかえらず、豚を飼つても小さい子ばかりが生まれ、それも2、3日で死んでしまう。耳を澄ましてもミツバチの羽音もせず、静まりかえっている。小川からも、生命という生命の火は消えた。いまは、釣りに来る人もいない。魚はみんな死んだのだ。白い細かい粒が、雪のように、屋根や庭や、野原や小川に降り注いだ…」（青樹築一訳・新潮社）。この作品が世に出たことで当時のケネディ大統領は大統領諮問機関に調査を命じました。そして作品発表の翌年、DDTの使用は全面的に禁止され、環境保護を支持する大きな運動が広がりました。カーソンの死後、DDTの危険性として指摘された発ガン性との関連がみつからなかったり、マラリア撲滅にDDTが使えず発展途上国に悪影響を与えたなどの意見もあり、本書が化学物質はなんでも悪であるという極端な環境運動を生じさせたとの批判もあります。

けれども私は、カーソンはやはり正しかった、と思います。そのときの情報のなかで最善を尽くす、誰かが行動にうつさなければ、後からでは取り戻しがつかないからです。本来、海洋学者だったカーソンが「沈黙の春」を書いたことは、未来の世代のために、いまを生きる自分が行動しなければならない、という切迫した思いからだったと思います。未来の世代に対するカーソンの科学者としての熱い思いと行動は、クジラ問題などにみられる「動物愛護」や「エセ環境主義」とは峻別すべきことだということも、あわせて申し上げねばなりません。

以上が私の問題意識です。ここから、私の実践報告を記します。

◎愛する日本、大切な海と魚を 手放していいのか

私たち日本人は、海の幸に恵まれること、海の幸に人生を重ねることを当たり前のこととして生きてきました。私自身のことをお話ししますと、クジラに特別の思いがあるのは、小さいころ、父に連れられてクジラの解体場を見に行った経験が、心に刻まれているからです。「クジラは神様が私たち人間にくれた世界で一番大きな海の食べ物なんだよ。だから感謝して食べなくちゃね」という父の教えでした。

お魚にも、特別な思いがあります。お節句のお料理や、結婚の結納品など人生の節目には、必ず海産物が添えられてきました。そのうえ縦に長く伸びた日本列島では、北に行けば北の魚、南に行けば南の魚が生息しています。獲れる魚が違えば、食する文化も違います。私にとって魚は、日本文化そのものなのです。

それが今、失われようとしています。日本人の魂ともいべき風土、漁業、そして食文化がいつの間にか危機的な状況にまで来ています。気づいた人が声を出し、海から食卓までにかかるすべての人が知恵を出して話し合う場をつくらなければ、大切な日本の食文化は失われてしまいます。

◎『海彦クラブ』で、こどもたちに 体験教育活動を推進

私はこどもたちへ魚食文化を伝える『海彦クラブ』という活動を2000年から行っております。この活動を始めたのは、日本人全体が無意識の

まま魚食文化から離れてしまっているという私の危機感からでした。その危機感からウーマンズフォーラム魚が生まれ、その延長線上にこどもを対象とした『海彦クラブ』の活動がスタートしました。だからこそ、『海彦クラブ』は1年にわたる体験的プログラム、毎回毎年初めての東京の小学校と初めての漁村を結ぶというプログラムになっています。ひとりでも多くの人に、ひとつでも多くの漁村に海と魚の大切さに気づき動き出してほしいとの願いから企画はスタートしました。

毎年、初めての漁村と初めての学校を結ぶのですから、浜と学校それぞれに何度も足を運んで説明し、ご理解いただくまでには時間も労力もかかります。そして足掛け1年にわたるプログラムですから参加するこどもはたいへんですが、大人たちがそれだけの思いを持って取り組まなければ、こどもたちに魚食文化を伝えることなどできません。私は文字通り、この活動に人生を賭けて取り組んでまいりました。もちろん、協力してくださる大勢の方やウーマンズフォーラム魚の仲間がいてくださってのことですが、毎回毎回、無事にまつとうできるようにと祈りながらのチャレンジです。

◎小さなジャーナリストたちが、漁村の意義を社会へ発信する！

『海彦クラブ』は、年間を通じて4つの活動を行い、海と魚を愛することもたちのネットワークをつくっていこう、という活動です。

春から秋にかけて、都内2~5つの小学校で『浜のかあさんと語ろう会』を授業として実施します。教室は、かあさんが浜からもって来てくれた魚とこどもたち、保護者の母親たちでワイワイガヤガヤ大騒ぎです。浜のかあさんがさばく魚を見て、最初は「かわいそう」、内臓を見て「気持ち悪い」と言うこどもたち。それが、見慣れた切り身になってゆくと「おいしそう！」にかわってゆきます。こどもたちは初めて尾頭付きの魚の姿を見、自ら包丁をにぎってさばき、新鮮な魚のおいしさを味わうのです。魚嫌いのこどもも「おそるおそる口に入れたら、おいしくて食べられた！」という体験に自分でビックリしています。そしてこどもたちは一様に「浜へ行きたい！」という気持ちに駆られ、作文にとりかかります。



浜のかあさんの豪快な魚さばきに釘付けになる
(東京都板橋区立志村第二小学校 / 宮城県女川町のかあさん 2001年7月7日)



授業は、語り合いからスタート(東京都中央区立月島第二小学校 / 富山県氷見市ののかあさん 2004年10月2日)



トピウオにさわったよ(東京都港区立高輪台小学校 / 八丈島のかあさん 2012年1月18日)



記念すべき100回目は、東日本大震災の被災地・石巻のかあさんをお迎えしました。(東京都港区立青山小学校 / 宮城県石巻市ののかあさん 2012年1月16日)



「机の上の水族館」で、学校が魚でいっぱいになった(東京都台東区立黒門小学校 / 福島県いわき市久ノ浜のかあさん 2010年11月9日)



立派なブリを、見事にさばく子ども(東京都大田区立新井第一小学校 / 富山県氷見市ののかあさん 2004年8月28日)



教室ではサンマの料理教室。校庭ではサンマ焼き大会。9年間、宮城県女川町と東京都板橋区の交流を推進した(写真は2000年11月3日 東京都板橋区立下赤塚小学校)



日本海にそぞく新潟市松浜の河口でサケ定置網漁を取材(2008年11月22日)

【秋】には、参加児童のなかから作文で選抜されたこども代表20~40人を“こども記者”として漁村へ連れて行きます。大学生のリーダーがこども記者を指導します。『こどもとサカナ体験ツアー』と名づけたこの旅で、こども記者たちは初めて漁船から海を見つめ、漁師さんの仕事のたいせつさを学ぶのです。漁師さんの家に泊めてもらい、早朝の船出を見送ったり同行させてもらったり。朝早く起きて海で働く漁師さんの仕事、それを支える家族の暮らし、海そのものの豊かさをまるごと体験し、おいしい魚をたっぷりと食べ、真っ黒に日焼けして東京に帰ってきます。

そして秋が深まり【冬】が来た頃、“こども記者”たちは「浜のかあさんと語ろう会」に参加した大勢の小学生や保護者、先生方に“漁村で体験したこと”を報告する『こども・海とサカナのフォーラム』を開きます。こども記者たちはそれぞれが「○○新聞社」「□□報道局」として、自ら撮ってきた写真や取材した各種のデータや漁師さんの話をもとに、浜のようすを立派に報告します。そして、どうしたら海と魚をまもつていけるのか、今日から自分が取り組むべきことは何かを考え、具体的な行動宣言をウロコカードに記し

ます。これは、こどもが自分自身と社会に「私が海と魚を守る」と約束するセレモニーなのです。

そして【早春】。子どもたちが自らの体験や感動したことをまとめ、絵に描いて表現し、大学生リーダーとともに『海彦クラブレター』を製作します。できあがったレターは、全国の小学校やお世話になった浜のみなさん、おともだち、自分たちの活動を報道してくれたマスコミ関係者に送り、浜と都会を結ぶ大切さを広く伝えるのです。

この一連の活動の意義は、こどもたちが大きなインパクトを持って「海・サカナ・漁村」を知ることにあります。小学校で行う『浜のかあさんと語ろう会』では、「産業」の視点、「食」の視点、「環境」の視点を大切に、こどもたち自身が考え体験することを重視して行います。また、一つの学校の枠にとらわれず、複数の小学校が一緒に活動する場をつくり、訪問先の漁村でも地元の小学生と交流の機会を持つなど、自分以外のこどもの考えを知り、理解を深めるプログラムづくりにも努めています。

さらに、この活動の社会的な意義は、こどもたち自身が漁村や漁業者の役割を理解し、自分



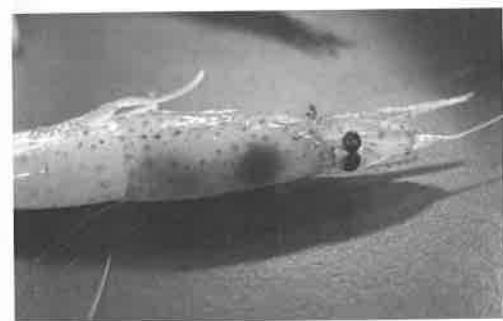
八丈島で漁師さんの家にホームステイし密着取材(2009年11月7日)



八丈島でムロアジ漁を船上で取材することも記者(2009年11月8日)



美しかった宮城県女川町出島。ホタテ、カキ、ホヤの養殖業を取り組む(2001年9月23日)



生のサクラエビ



サクラエビの資源管理について組合長にインタビュー(静岡市由比漁港 2011年12月24日)



どれたでのキンメダイを魚市場で取材することも記者。静岡県伊豆稲取(2004年1月11日)



新潟県寺泊で取材した魚料理を報告するこども記者(2002年12月21日)

たちのことばで広く世の中に伝えることにあります。参加したこども自身にとって一連の体験は深い意義がありますが、それにも増して重要なことは、小学生が“小さなジャーナリスト”として社会に「漁業・漁村」の存在意義や「海の環境保全の大切さ」「食料としてのサカナの重要性」を伝えることにあると、私は考えています。

参加されたこどもたちや保護者からは、「海の恵みのありがたさを実感した」「魚が好きになった」「漁師さんに感謝したい」という反響をいただきます。「海のいのちが魚をとおして私たちにつながっているんですね」と感想を寄せてくれるこどももいます。

1年間のプログラムを終えたこどもたちの宣言をみると、「ご飯を食べ残したり、海を汚したりしない、ゴミをなるべく捨てないように努力する!」「水の節約します!」「お風呂に使った水を洗濯に使う。水の再利用!」などなど、今日からできる具体的な取り組みが並びます。また、『こんな海にしたい!』というテーマで絵とメッセージを書いてもらうと「海をきれいにしたい。そしてイセエビが大きくなつたのを、勇神丸の漁師さんに

とつてもらいたい』など、環境問題と漁業、食文化の大切さを理解したメッセージが自然にでてくるようになっています。

1年間、教室で、また漁村で学び、人前で発表することを通して、こどもたちは驚くほど海と魚の応援団になってくれています。『海彦クラブ』の活動を始めて12年、まだまだ小さな活動ですが、参加児童はこども記者400人、「浜のかあさんと語ろう会」「こどもフォーラム」の参加児童はのべ1万人になりました。



八丈島での取材成果を劇で発表する(2009年12月20日)



「こんな海にしたい」～絵とメッセージで発表する(2002年12月21日)



恒例の「うろこメッセージプロジェクト」

～私は海とサカナを大切にする!と宣言する全国のこどもたちのメッセージカードで大きな魚をつくる(2012年2月4日)

◎東京湾は首都圏3000万人の暮らしとつながっている

海彦クラブでは、全国6000の浜と東京の小学校を結ぶ試みをつづけてまいりましたが、私がもうひとつ、どうしても立ち上げなければならないと思っていたのが首都・東京の目の前にある東京湾についての学びの場づくりでした。徳川家康の江戸幕府の開府以来、特別な地位をもらった江戸の漁師たちは、独自の漁業を営んできました。浦安あたりでは、浜辺を歩けばカレイやヒラメを踏んでしまうくらい、東京湾は豊饒の海でした。それが昭和30年代、高度経済成長と東京オリンピック開催のために「漁業の海」から「港湾」へと変わりゆき、昭和137年には海苔養殖業が漁業補償と引き換えに消失。沿岸域の埋め立ては一気に進み、河川への工業排水垂れ流しも加速して東京湾は死の海といわれるまでに汚染されてしまいました。



東京湾のベテラン漁師さんから、東京湾奥に唯一残っている干潟「三番瀬」の豊かさを教えてもらう(千葉県船橋市の三番瀬海上 2010年11月28日)

その後、環境問題への関心が徐々に高まるなかで、東京湾に流れ込む河川においても規制がかかり、昭和50年代に入ると漁場環境が改善されてゆきました。屋形船も復活して投網を楽しむ江戸文化も少しずつ息を吹き返し、漁業においても巻き網、刺し網やアナゴ漁、シジミとりが行われるようになってきました。

こうした、東京の目の前の海について学ぶ場



東京湾(品川)の若手漁師さんから、東京湾の歴史や漁場を聞く
(東京都品川区立台場小学校 2009年10月13日)



クジラについての歴史や文化、世界の国の考え方を講演する白石ユリ子 WFF 代表
(宮崎県高千穂町立高千穂小学校 2007年10月31日)

を持ちたい、という私の願いは2009年に実現しました。東京湾の東京側の漁師さん、千葉側の漁師さん、それぞれにご縁をいただき、「東京湾まるごと探検隊」を学校と洋上で開催することができました。3年目の2011年度は、東京湾の放射能汚染について保護者から懸念の声があがったため、食べる授業はできませんでしたが、学ぶことは止めず、食べることにこだわらない授業を進めてまいりました。

こどもたちは、地図を見れば身近にあるのに、その姿を知らなかつた東京湾を学ぶと、心がさざめき立つようです。お台場の観覧車や大きなビルのすぐ前で漁業を行われていることに関心を持ち、「ぼくは将来、漁師になる」と言いだすこどもも出でています。こうしたとき、私は現場を見ることの大切さをあらためて実感するのです。

てまいりました。こどもたちと一緒に鯨料理をつくって食べることも行っています。鯨食は、日本だけの伝統文化ではありません。その広がりと奥行きを伝えるために、世界史のなかでの捕鯨の位置づけ、鯨油の利用と石油の発見、資源管理の仕組み、世界の食のありよう、肉食と魚食の違い、捕鯨の賛成国と反対国、などを網羅した授業「クジラから世界が見える」をパネルを使いながら行っております。

この授業でこどもたちは、1つの見方だけではないものの見方を学び、世界にはさまざまな文



講演前にはクジラの部位を説明し、全員でクジラ料理をつくって味わう(東京都江東区立八名川小学校 2010年1月15日)

◎クジラから世界が見える

クジラについては先にも記しましたが、私は「クジラから世界が見える」と題した授業を行つ



クジラと人間の関わりやクジラの生態、世界の人々の考え方の違いをわかりやすい絵と文で書いた一冊です。英語版もあります。

(日本語版 2006年12月発行 遊幻舎)

化があること、それを他の国の人ほどどのように考えるのかを議論しながら学んでいくのですが、私が考えた以上にこどもたちは広く深く受け止めてくれています。答えが先にあるのではなく、自ら考える授業のおもしろさに目覚めたこどもたちからは、授業のあともたくさんの質問や感想が寄せられるのです。

そうした声もふまえ、2006年に私は「クジラから世界が見える」という絵本を書き、発行しました。この本が昨年から小学5年生の国語の教科書に載ることとなりました。多くのこどもたちが、クジラについて自ら考えるきっかけが広がったことを、私はなによりうれしく思っております。

◎これからの日本を、海の視点からつくっていこうとする若い芽が、育ってきました

私がこどもたちに伝えたいことは、「資源のない国・日本にとって、海と魚は大切な財産です。私たちは毎日、大いなる海のいのちをいただいて生きているのです。海の恵みに感謝し、海をまもってゆきましょう」ということ。そのためにどうしたらよいかを、これからもこどもたちと一緒に考え続けてゆきたいと思っています。「大いなる

海の豊かな恵み」は放つておいては守れないのですから。

この私の願いにこたえて、こどもたちが動き出しています。私自身がいちばん感激しているところですが、12年間積み重ねてきたひとつひとつの活動が、こどもたちの心に確かな種を植えてくれました。

東日本大震災に際して、かつて『海彦クラブ』で学んだ小学生たちが大学生になって私のもとへ駆けつけてくれました。若い社会人もいます。あのときお世話になった女川のかあさんたちのために使ってください、と自ら集めた義援金を届けてくれる大学生、被災地への炊き出しに応援してくれる若者、東京での支援活動に力を貸してくれる面々に、感激の1年もありました。私がなによりうれしく思うのは、いまもつづけている『海彦クラブ』で、かつてのこども記者たちが大学生リーダーを務め、小学生を指導してくれたことでした。

ウーマンズフォーラム魚を立ちあげて19年。『海彦クラブ』を始めて12年。日本の未来を海からつくりなおそう、海と魚の視点から日本を見つめ行動しよう、という気概を持つ若者がたしかに育ってきています。自分たちでグループをつくり、日本の漁業を変えたいという大学生や社会人が私たちを訪ねてくることもしばしばです。海と海辺で暮らす人々の現状を知り、動きださずにはいられない、と思っていた私の志は、いま、ひとつの目標を達成できたようです。



「こどもとサカナ体験ツアー」では、私自身がこども記者と一緒に取材してきました。千葉県勝浦市でカツオの水揚げ 2000年11月11日

「東京新聞」2010年10月26日付朝刊より

海がはぐくむ 命の恵み伝える

東京の子どもたちが東京湾で捕れたサバを自分で調理して食べようという特別授業が二十五日、文京区立根津小（同区根津）で行われた。東京湾の漁師が講師を務め、五、六年生の児童約七十人が、海の力と役割、東京湾と自分たちの生活についての話にも耳を傾けた。

「目が怖い」「マルスルする」「血だめ」。一人一匹ずつサバを与えられ、こわいわざる子どもたち。大騒ぎの末、みんなソテー、漁師汁の三品が完成。目玉にのられ、血の滴る「命」と格闘した分、「いたたぎま

文京区立根津小 東京湾の漁師が特別授業



東京湾で捕れたサバの説明をする大野さん＝文京区立根津小で

す」にも気持ちがこもる。手伝いに訪れた女兒立ってきた千葉県船橋市の母編は、「骨のある魚漁業協同組会長、大野一朗、海を守るためにまつめ、五、六年生の児童約七十人が、海の力と役割、東京湾と自分たちの生活についての話にも耳を傾けた。

「目が怖い」「マルスルする」「血だめ」。一人一匹ずつサバを与えて、こわいわざる子どもたち。大騒ぎの末、みんなソテー、漁師汁の三品が完成。目玉にのられ、血の滴る「命」と格闘した分、「いたたぎま

す」にも気持ちがこもる。手伝いに訪れた女兒立ってきた千葉県船橋市の母編は、「骨のある魚漁業協同組会長、大野一朗、海を守るためにまつめ、五、六年生の児童約七十人が、海の力と役割、東京湾と自分たちの生活についての話にも耳を傾けた。

「目が怖い」「マルスルする」「血だめ」。一人一匹ずつサバを与えて、こわいわざる子どもたち。大騒ぎの末、みんなソテー、漁師汁の三品が完成。目玉にのられ、血の滴る「命」と格闘した分、「いたたぎま

す」にも気持ちがこもる。手伝いに訪れた女兒立ってきた千葉県船橋市の母編は、「骨のある魚漁業協同組会長、大野一朗、海を守るためにまつめ、五、六年生の児童約七十人が、海の力と役割、東京湾と自分たちの生活についての話にも耳を傾けた。

「東京湾まる」と探検隊「東京湾漁業を学ぶ会」と題した授業は、命をはぐくむ海に感謝する心を育てようという中央区銀座の市民団体「ウマンズフォーラム魚」（白石ヨリ子代表）の活動の一環。同小児童は来月、大野さんの漁船に乗組み、東京湾での巻き網漁業を見学する。

（井上圭子）